談

話

室

「鍵はダイバーシティ」 男女共同参画・若手支援シンポジウム報告

大上雅史¹, 根岸瑠美²

¹東京工業大学大学院情報理工学研究科 / 生物物理若手の会

²東京大学分子細胞生物学研究所 / 平成25・26年度生物物理学会男女共同参画若手支援委員

1. はじめに (根岸)

第52回生物物理学会年会にて、第11回男女共同参画・若手支援シンポジウムを開催しました。

表題: ワークライフバランスと子育て支援の取り組み

日時: 2014年9月26日(金) 11:45-12:35

内容: 趣旨説明(有坂委員長より)

話題提供(坂内博子氏)

グループディスカッション

各グループの議論内容の発表

今回は、一分子観察を用いた脳の分子機構の研究において第一線で活躍されている坂内博子先生(名古屋大学)を講師としてお招きし、留学での経験や名古屋大学のユニークな子育て支援策についてお話いただきました。また新しい試みとして、講演後にグループディスカッション(以下GD)を実施し、参加者のみなさんが普段感じていることについて自由に議論する時間を設けました。女性参加者は全体の約3割で、年齢別では、20代の方が40%、30代が29%と、比較的若手が多かったものの、幅広い年代の方がご参加くださいました。女性研究者や若手研究者の抱える問題に対して、多様な立場から盛んに議論されたようです。本シンポジウムの内容は、GDのファシリテータを務めてくださった大上雅史さんのレポートとして本稿の後半に掲載しています。

男女共同参画・若手支援委員会では、啓蒙活動の一環として、今後も参加者が積極的に意見交換や交流を行えるような企画を継続してまいります。本シンポジウムの開催にあたり、当日の準備やGDのファシリテータを快く引き受けて下さった先生方および生物物理若手の会のみなさまに深く御礼申し上げます。

2. シンポジウム参加報告(大上)

坂内博子先生は2000年に学位を取得され、同年から理化学研究所脳科学研究センター(以下理研BSI)の研究員として勤務、その後2005年からフランス、パリ高等師範学校にPDとして2年間留学されました。帰国後は日本学術振興会特別研究員(RPD)として理研BSIに再び所属し、2013年からは名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻の特任講師に採用され現在に至ります。この間、2010年に長女を、2013年には次女を出産され、名古屋大学へは「子連れ単身赴任」をされるなど、留学や出産・育児といった研究者にとって重要なライフイベントを多々経験されています。

坂内先生のご講演は、「なぜ留学するのか?」「研究とライフイベントの両立(名古屋大学での取り組み)」の2つのトピックで構成されていました。最初の「なぜ留学するのか?」では、フランスでの経験を語られました。留学先のAntoine Triller研究室では、8:30-17:30が主な活動時間であり18:30には皆帰ってしまうことや、女性研究員の6人中5人が子育て中、男性研究員も6人中5人が子供をもつという当時の状況が紹介され、日本の一般的な研究室との違いがとても印象的でした。しかし、一流の研究が行われ、高インパクトのジャーナルに論文が出ていたことから、一流の研究と家庭(育児)は両立可能であると確信し、これまでの研究の進め方を見直すきっかけになったと坂内先生は語られました。次の「研究とライフイベントの両立」では、出産や子育て経験の話や、名古屋大学独自の取り組みをお話いただきました。『名古屋大学は日本で最も女性研究者にフレンドリーな大学だ、という噂』は私も最近良く耳にしますが、実際名古屋大学で

The Keyword is Diversity: Report on “The Symposium of Promoting Gender Equality and for Encouraging Young Researchers”

Masahito OHUE¹ and Lumi NEGISHI²

¹Graduate School of Information Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology / Young researchers group for biophysics

²Institute of Molecular and Cellular Biosciences, The University of Tokyo / Committee for promoting gender equality and encouraging young researchers

は近年、女性限定公募など男女共同参画の積極的推進によって女性教員の数が大幅に増えており（生命理学専攻の例では2006年2名→2014年13名）、坂内先生ご自身もこれに応募されて着任なさいました。一方、名古屋大学では家族ぐるみの交流や情報共有も推進しています。坂内先生たちが中心となって「名古屋大学子育て単身赴任教員ネットワーク」を設立した背景には、女性研究者同士でワークライフバランスについて情報交換をする中で、昨今の「子連れ単身赴任」の増加が浮き彫りになったことがありました。坂内先生ご自身も現在はご夫婦それぞれ東京（旦那様と長女）と名古屋（坂内先生と次女）に分かれて生活されています。理研BSIにも在籍し、東京でも研究を行うことができる環境をお持ちです。坂内先生いわく、これはひとえに「イクボス」（育児に理解のある上司）の存在のおかげだとおっしゃいます。

講演の最後に、名古屋大学の神経科学者が中心となって推進している脳神経回路研究拠点が紹介されました。脳神経科学分野では、米国のBRAIN Initiative¹⁾や欧州のHuman Brain Project²⁾といった国家プロジェクトが有名ですが、名古屋大学の脳神経回路研究拠点はもともと坂内先生を含む3名の女性研究者が草の根的に進めてきた活動が原点となっています。同じ建物に偶然居合わせた女性神経科学者3名の何気ないおしゃべりからディスカッションへと発展し、この研究拠点が誕生しました。この脳神経回路研究拠点は世界トップレベルの研究機関との連携や、国内外の気鋭の若手神経科学者の招致などを経て、2014年には2度の国際シンポジウムを開催するなど、最近では非常に大きな展開を見せています。ワーク／ライフどちらも妥協せず追い求める坂内先生の行動力と、名古屋大学という理想的な環境との相互作用が、この構想の実現に大きく寄与したのだと感じました。

ご講演の総括として、坂内先生は研究力の強化にはダイバーシティが重要であると説明され、留学や所属機関などの環境の変化をプラスに活かして研究活動を行うことが望ましいと語られました。年齢、性別、国籍を問わず、さまざまな境遇の研究者が一同に会し、問題点を共有して多様な視点で解決していくことで、新たな発想による新たな発見が生まれるのです。実体験に基づく生の声に、女性の参加者はもちろん、男性の参加者も得るものが多かったのではないのでしょうか。

ご講演の後には参加者同士のGDが行われました。このGDは各グループで結論を導いていくような形式ではなく、参加者同士の交流と親睦を深めつつ多様な意見に触れることを目的としたものでした。各グルー

図 1

グループディスカッションの様子。

プが自由にトピックを設定し、グループによっては複数のトピックが入り乱れてざっくばらんに意見交換が行われていたようでした（図1）。

多くの参加者が坂内先生のご講演に刺激を受けたようで、「女性の大学院進学率や就職」、「女性限定公募と男性への不公平感」、「留学についての意見交換」など、講演と関連するトピックが特に目立ちました。私たちのグループでは、「研究者として良いサイエンスをするためには」、という問いから話が膨らみ、日々の生活の豊かさが大切だ、第二の職になりそうな技術を身に付けておくことに余裕ができて良いサイエンスができるのでは？といった自由な発想による意見が交わされ、短い時間ながら非常に濃密な時間を過ごすことができました。一方、私の参加したグループは男性だけであったため、女性の話も直接聞いてみたかったかなと思います。女性参加者がいた他のグループでは、任期付き職とライフイベントの時期が重なりやすい問題に対して、任期中の出産・子育てを支援するようなグラント制度ができないかなど、女性のライフイベントに関するトピックが比較的多かったようです。なお、このGDでは各グループに模造紙と付箋紙が配られ、参加者が意見を自由に書き込む形で議論が行われました。この模造紙は、本シンポジウム後に年会のポスター会場に展示され、多くの年会参加者が足を止めて眺めていました。

坂内先生のご講演も含めてこれまでの年会では聞くことができなかった話を聞くことができ、満足度の高いシンポジウムでした。私自身、世代が上の方のワークライフバランスの考え方や経験談が非常に参考になりました。今後も、このシンポジウムが多くの研究者や学生が世代を超えて自由に交流し情報交換のできる場となればと思います。

文 献

- 1) Insel, T. R. *et al.* (2013) *Science* **340**, 687-688. DOI: 10.1126/science.123976.
- 2) Markram, H. (2012) *Sci. Am.* **306**, 50-55.

大上雅史

大上雅史（おおうえ まさひと）

東京工業大学大学院情報理工学研究科特別研究員・日本学術振興会特別研究員（PD）

2014年東京工業大学大学院情報理工学研究科博士後期課程修了，博士（工学）。14年より現職。

研究内容：タンパク質ドッキング計算，タンパク質間相互作用予測を中心とするバイオインフォマティクス

連絡先：〒223-0062 東京都目黒区大岡山 2-12-1 W8-76

E-mail: ohue@bi.cs.titech.ac.jp

URL: <http://www.bi.cs.titech.ac.jp/~ohue/>

根岸瑠美

根岸瑠美（ねぎし るみ）

東京大学分子細胞生物学研究所特任助教

2009年名古屋大学大学院工学研究科単位取得退学，博士（工学）。09-13年東京工業大学生命理工学研究科研究生，13年東京大学分子細胞生物学研究所博士研究員を経て14年より現職。

研究内容：液クロ質量分析によるプロテオミクス，造腫瘍性に関わる染色体の高次構造解析

連絡先：〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

E-mail: lnegishi@iam.u-tokyo.ac.jp